



Title	小序
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1966
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77284
Type	manuscript
Note	『鈴木栄太郎著作集 6 (国民社会学原理ノート)』を出版した際のソースとなった原稿である (同書内での言及による)。; 資料作成年不明 (システムの制約のため、発行日には没年を入力した)
File Information	fix_X056_01.pdf



[Instructions for use](#)

序

◎これほ私の遺稿となす（おれと思ひおぼすものなり）此の序の行はたうかうあるや

ついでに書かれたりして

ちよ、書かすかへたへる頂か相あるに請ふてはけ

これが一先づ

事案の公の書は

これに上梓すよりにした。◎や、精

遺稿の序はこれの序

魂つ不感しがすのり。これ一序

これか

成りしなり。世の生かへては、いかにある

甚しく自序の

得

おれは心はまゝに及ます。うは余りなり

踏会

あはら女、中道持となつておれと

方々

生きたりあり

んは日にたかたか不安あり

にたかた

たかたあり

昭和十五年六月に北大病院を退院

北海道に来る時

△をねは、わは昔よりおとど思ふ所。
△をねを案得有。
水事

し有村以来、和の所定は昔より都多

此よりなみに集申した。昔の舞の類か、皆申す
此の舞の類か、皆申す

和の北にこれいり、清和は毎年都多
清和は毎年都多

此の字の足下に次に此と
此の字の足下に次に此と

取柄、この五十一年の清
取柄、この五十一年の清

和で、和の昔より都多此の字の
和の昔より都多此の字の

伝子の金字を取へよ
伝子の金字を取へよ

ここに公判す。母本者は此は此
ここに公判す。母本者は此は此

① 清義をす。五を甲斐を感

在れは之を甘きし。爾病に甘き。二事あり

② 石をす。清義をす。又合籍一杯

のあふから。物は係神のた。又神のた

切の丸形。甲から。致免させし。ら。て

北大より。都教授。厚の。咳か。い。底。薄。かな

けれ。石。物の。磁。定。ゆ。私。の。年。第。中。は。完。成

し。あ。か。つ。た。石。の。磁。定。ゆ。私。の。年。第。中。は。完。成

之。に。記。し。て。感。謝。の。意。を。表。し。た。へ。口。交。向。と。記。す。判。者。成

又これ

本年おとせ年つきの清義 たの さんにおかれはかり

世故をかへたものがある、
北太の弟の事強ひつて

私はこの世をすくはぬ病したけはな

いなかたの世に 如し少しも元多かたは 清義安未の執筆

半信 信じていにお念す あまの

公報の命令や儀禮的お一ちの 報団

今おとせ あつ 世におかれはかり

いよいよ あ 清義 せめ

おぼすほしものいさるがゆゑとぞ思ふ

すするのよよの松の毛袍を度更如し

しうあちとてとせぬ女に一生あつ

ルよい清糸家を作別むしぬ

4
L
Y

完成ふ

この一巻を書き終へたなりし

にしあはと思ふたが何故あつた

中。そんたりいし十巻を完成す

るう又出来てそれを生かすに

上梓すゝめ女
 女事あるは
 母の存を
 孝のあり。

アキカニハ澤山の社名を云ふ澤山の
分限の分限の比喩者流と自己を以ていふか
立止働の石室の籠りしと居る

序文の一部

No.

私が、都市文化の発展に志したのには
 既述の如く、私自身が、^{所謂}「^{都市}文化」の
 発展の願望をして居るのみならず、
 者やに現存する人類の文化とアメリカの
 文化との間に、^①「^{都市}文化」の発展の
 以上の如くである。その外、知り得る限りは
 アメリカには各分野の文化が、即ち忠実
 の文化や都市文化の発展の促進、犯罪
 防止の手段としての文化の発展に、或は
 市の業績が、つづいて居る。

文化の発展の促進
 都市文化の発展
 世界研究

實際の

全般の経済は貧弱であるが、知
 人々の生活水準の分断は少くとも常
 識を越えては、その確立は積まぬべき
 常態の維持に努め、それによつて
 経済の発展に資する。この基礎に
 の上では、たゞの知識の進歩に努め、
 重んじられるべきである。他方、
 技術的知識の普及に努め、これによつて
 生産力の向上を図るべきである。こ
 の二つの方面は、互に補完的である。

しちう概念
を整理しなう

流れが見ても正確と思へる字はあからずある。

の読字

10.

正確なる程度に同する。然るに、
 この領域内限りにおける傾向を
 現見するに満足する。又の謙虚さ
 がある、よいか、
 大將にならなさいよ、
 の現象、
 である。その意味、
 分節が、
 くるのか、
 大將の早退が多すぎる、
 軍隊の早退が少

おとし

⑤

日本のあつた世界の学問に對する最高の貢獻は
矢張りはこれに在る。この實に固まるものである。

然るに、そして、特に日本に於ける社會的、政治的の

文明は、日本人の手による最も正しく、虚脱させ

、思ふべきである。考へて見れば、日本の文化は、又實にこれ

、統一的に、科學者の眼光の下におかれ、平面的

方面は甚だ多い。都市の、また、洋風を、

未だの領域を、探して、見る程に、思へん。

ちす万二片の。そんな考のかつて
 あよ。
 それか、日本の流石はやはり日本の
 名流によつての片最し木や木正破の
 流々家それだともいふことである。私は
 外白人の日本の現況をいかにせん
 いふ。場合を決して多岐をいふに
 よく知らん。和文三年子知舞に片
 自ら自身といふは朝鮮日本の歴史に
 たいしては流々たる相者に深くおし
 徳なり

素心
 〇

三思いあらう事

思つて居るけれど、やはり私にエトヲ
ンせしめなかつたに違ひない。とさうも
つたのであつた。

私は湖都の都市に同して若くはなす
かもしつと精神の的に研究するよとよは
かと思つて居る。とさうもつた。とさ
アメリカの女子も思つて居る。とさ
り、その希望が隆くあつた。とさ
比より話す機会のあつた。とさ
武吉君、横山君、故思君、都市

予頃が一徹盡すべからずはな

と云ふの事

私はこの際中絶する所の研究に専念して来た。

その研究が完成するまでと云ふ事へおろそかにならぬ事を
忠告する所の事もあるが、至らぬ事には深く解らぬ事からい

近頃の研究が終つて、この都市研究は私にとつては
前にかは他者の口には感ぜられぬ事である。
見えなかつた事である。

然し愈々種々の都市社会学の研究もに専念しやうと
一歩のその足を入れようとする金く他口に来た心地である。

（Faint vertical text on the left margin, possibly bleed-through or a separate note.)

① ✓

② ✗

此字をやつたうに
 能く浸れしつた
 と云ふことあり
 此の時折はしつた
 五十九の折はしつた
 踏石心はしつた
 心は決した
 まるで倒れ
 この決心を
 一のつたこと

此の折はしつた
 五十九の折はしつた
 踏石心はしつた
 心は決した
 まるで倒れ
 この決心を
 一のつたこと

此の折はしつた
 五十九の折はしつた
 踏石心はしつた
 心は決した
 まるで倒れ
 この決心を
 一のつたこと

書の中に都府此なるを執筆する可きを
 指し示さうなれば矢は能くつるをば
 此のてあ。せうとうすするし出まなひ。
 けれどもおほい前都府は外(外)に
 甲大うかにせはる都府此等の書蹟を
 今ししては^執ある^の的^のねらう^の考へが
 口々に^執ある^の的^のねらう^の考へが
 もゆいかにして^執ある^の的^のねらう^の考へが
 と^執ある^の的^のねらう^の考へが

私に北火に集むのは昭和二年九月

癸病（？）の都市の同様の論文である。

私はこの年の十二月に北大に來りてから、
海文として「都市の政治性」を題する一文
を草した。雜誌「健民」に載せられた。この
地方雜誌のために書いたのである。この論文
は次の年の三月号に掲載された。これは、
かゝる存続の比から病床に倒れ、
療養生活に入ったもの。その病床の掲載さ
す雑誌は「健民」に「見よ」の掲載さ
す。何事もなく、
どこかに書かれたものであろう。

健民

おさな地方

昭和二十三年

と云ふ雑誌はほんの一時あの高時又出版
されし雑誌にてあつたものと云はれる。都市に
ついで南に都市社会をあらわす。都市社会
かつた以上の語をとりしおれはたつたかしの
てあつた。

新の心の中

其の雑誌生活のすゝめは可なり
は都市社会をあらわす。私は物に
ついであつた。都市社会をあらわす
れ文に心は厚ぼりの。病院から
こかうはアナタの都市社会をあらわす。

⑩

奥井修吉郎氏の大著作を讀みしめくを讀みしめく

比書の優れぬ内容に感服して矢先に幾時英一

の著書と都糸²⁸社^{本内社}の^{26.5}都糸社^の地理学研究

相ついでに述べられた。新編^{つた地}足尾銅毒事件

の概要は面白いと思つて研究はついでに述べた

を著く意味は大きかつたと思つた可いであらう。

ほか、いあし。けれど、私の病氣は生死を
 従来す！ 存重態をくつかへしと片ん。
 斗の十費が案 都市の社会構造に同す。
 足解、^出出^社社^時時^にに^はは^もも^うう^死死^んん^てて^よよ^いい^やや
 思、^左左^のの^好好^年年^のの^研研^究究^はは^俄俄^かか^にに^突突^破破^はは
 左^のの^接接^すす^よよ^くく^進進^んん^たた。サレ勉強しては
 又倒れ、病態生活が相あるついでにはええん
 左とくもとし。又執筆して何おかして又
 倒れ、よええ、よのりかへして居て
 この一考よか成すれはもう死んで

て書いた原稿に出版出来たりは夢の存在
草と云う二片だけ

松本氏の社会学の著者の研究として

社会学の発展の歴史の研究に於て

その意義が如何に感じられるかを

述べんか、私は社会学の研究は

社会生活の秩序と基本的な関係の

原理と云ふ事に最高位の秩序を

期待する事そのものとして考へる事は昔々

から愛する事であるとのより社会学の分野の

小

調査

なる、うまはな。

研究をいふことは予盾である。研究は
、^{研究}自身では根柢ありきである。

私の都市研究は都市生活に於ける

都市生活の基本的構造と基本的生活形式

的におおむね文化構造を既成形式を説明する

由のをたつてゆく。これは、^{研究}の根本的構造である。

これは、^{研究}の本質である。これは、^{研究}の本質である。

これは、^{研究}の本質である。これは、^{研究}の本質である。

私は都市研究の本質を研究の中心に置く。これは、^{研究}の本質である。

研究の本質

しつはな。

あはれ
向海

愛に似せし方とたてし身のは北大に於け
 の私の君をのめりてあつた。私の
 この研究は全く私の私を切力して
 達成したものである。私女彼等に
 たりよると私女彼等にやんたり本
 身のこの所存はかきとよめり。彼等は私に
 著しよるとはよつてやんたりかき私女。
 私の二人の忠助半冠森森能取と
 富山盛君が私の癡りなり。

なり私自身身か試みよりしつと
 活況に正確に調査してくれなかつたら
 この研究はともし成就をまなかつたといふ
 ストライヤ中の工場に於いては
 効力の二回作の力強の線を確認すよ
 為の調査の様は如きは私自身身か
 健康をまっしる果しは存なかつたか
 健康をまっしる果しは存なかつたか

序文

我が口には 都市紀行の序文

既に奥井後太郎福打菜一両見の大著
 か出て来たので、新か、屋上層を重なる仕布
 はないと思つて、これと、都市の数字に
 記すを、適用し、余地、~~も~~大珠、これ
 といふと、これと、都市の数字、
 記すを、~~も~~大珠、これ
 大著の補記の役目、
 業である。又、
 な、
 了か、
 了か、

朝辭に任んで居る朝辭の人書の
 書のいた者極や何か心考りて又と文書が
 北常^おに考りてあのに^威に^いた^あもの
 事^は朝辭には字を考く^子女^来は^だしく^はつ^た
 人^かよの字を考いて居る^しと^名に^いん^んの^ん子^を
 考らな^い人^か多^いる^に考^らな^い朝^辭の^人
 には又を考く^子書^道は^一つ^の高^い教^養
 の^中で[、]文^は実^的に^用いら^れる^のは^なし
 して[、]詩^をよ^んたり^とは^れる^のは^なし
 へ^とよ^いた^り、^考ら^れる^の高^い

故に考らるる

考らるるの高き

日本で

を人に与すものであつて、八百屋の束ね物
 が記憶のための記録として書き記さしつた文
 字の使ひ方とは全然異なる。日本
 人は漢字を習くのに下午^はであつた。知し皆
 知つて兵^は限りの文字は実生活に活用^{して}
 居る。それなくしては生活が支那の如く
 漢字を生活に活用^{して}する。
 我々凡そを同くするものもそれを教養
 のために貴後達かいやく知から自身につけ
 た時代もあつた。あつた。少しもそれを

今口では大抵の如くは

活用
 活用

しやうとして居る。

実生活に活用するものと仲ある。人文

のお飾りとして 唐席の書道や廿七廿八

連巻の奥書をなすのり （これは此の意義はあつか

ぬに文字が人生に活用される （この 又は茶本寅

用をいふ （この）またけいなるはあかしした （或いは名理に作る成光の

上いる （この） 貴族者の教養の看板に

用いれ （この） 素をぬにさうたつたの （この） 女ううか

学問と互へは抑柔度の高いしのを尊しとし

そのれを絶対的のものとして来た。学問はお飾り

て女うかうそのれを絶対的のものとして来た。絶対

東洋的階級思想に先んた一つの先
程がとうとしたのである。

的でなるとしては現象の爲に密多に批判し

其等の一也の如きもの
か東洋の階級は自前の階級に依

その同の絶対とは何ぞいへば何ぞいへば

平準と云ふものが絶対無批判のものとせば

此の片はどの位はどうか。

生活の各方面に於ける知識や技術を

適用しむる方面と云ふは其の^{は明なところ}二片の學問

常識的を判断せよと云ふやなく何程

かたも其の考へべきを整理し

て見よと云ふ場合がある。

決して

学問は君子の世の生活は庶民の世のと思はれざるが爲。

又私等の生活を正しく正視する為
 にも歴史的な社会研究は必要である。
 了。それは常になつたつてある。そのたつ
 た一つの事實の上に出る判断の基
 礎をおい^て立論する事が正當なる
 科学的な^論論であり又正當な生活の
 仕方である。それは正當なるもの
 である。その云ひ違ひがあるが現世の生活には如何
 に正しくされべきかであるか。

情勢を正しく見れば革命はいやふと起るとし

原始の時代の材料が、
 思はれぬほど考へ方を
 的に考へ直して見れば、
 松本